

発話行動における「で」の役割 ——「で」のフィラー化をめぐって——

小 出 慶 一

発話行動における「で」の役割 ——「で」のフィラー化をめぐる——

小 出 慶 一*

たんですけれども（…）。（A04M0026）¹

1. はじめに ——本稿の対象、目的——

この稿で扱う対象は次の例に見るように、講演などの一人話に頻出するといわれる「で」である。

1. で、そうすると(F あの一)新しい学習単元が (F え)組み込まれてますよっていう形で(F え一)学生さんには提示すると(F え一)というようなインターフェースになっております。

で、(F え一)この (F ま)システムに関しましては<ベル>(F え一)(F ま)(A アイピーエー; I P A)さんのですね(F え一)教育の(F お一)情報化推進事業の中で実施させていただいた関係で(F え一)実証実験を行ないなさいと(F お一)という案件でございましたので実際この作られたシステムで(F え一)実験を行ないました。(F え一)期間はですね昨年度なんですけど四か月(D か)実際四か月半ですね。

で、(F え一)参加学生数は学生が二百五十六名講師三十名。

で、環境は(F ま一)学内のイントラネットおよびダイヤルアップと。

で、内容はですね授業内容はこれは学生さんには内緒で(F え一)正規の授業の中で(F え)単位を認定する通常の授業の中で実施し

この引用部分には、6つの文が含まれているが、そのうち5つの文の文頭に「で」が現れている。石黒（2008）は、講演などでは「で」の「量の多さに圧倒されます」（p. 190）と述べているが、この例を見ると、確かにそう感じられても仕方がないと思うほどである。それも、文の途中に現れることは少なく、ほとんどが文の冒頭に現れる。このような「で」は、談話の中でどのような機能を果たしているのか、どのようなときに現れるのか、これらを明らかにすることが本稿の目的である。

2. 先行研究

まず、「で」について触れられている先行研究をいくつか見てみることにしたい。

「で」は、従来、「それで」「そこで」などの縮約形として見られてきたようで、そのような視点から「それで」「そこで」の説明の補足的な観点から説明されることが多かった。²その中で、比較的早い時期に言及しているものとして、田中（1984）が挙げられよう。田中の議論のポイントは、「で」が「それで」から生じた接続詞であること、そして、その機能を

2. もっぱら会話に用いられ、『ソレデ』と同様に、前件に無理なくつながる事象を結び付ける。（p. 103）

* こいで・けいいち
埼玉大学教養学部教授、日本語教育

と分析したところであろう。「無理なくつながる」という表現は、「必然的な事象の接続」ということの言い換えとして使われている。その例として次のようなものが、挙げられている。

- 3a. 結婚するそうね。で、どこに住むの？
b. 母が入院したんだ。で、これから見舞いに行くところだ。³ (p. 103)

その後、西野 (1993) は、「で」に次のような2つの機能を指摘した。それぞれの例を付して示す。

- 4a. 聞き手が話し手に、さらに続けるように促す際にも使われる。
・で、とまっちゃたの？エンジン。
b. 聞き手からの聞き返しによって逸れてしまった話題を、元に戻す際のきっかけとして現れる。その際、話し手、聞き手の役割を、聞き返しの前の役割に戻す。
・妻「前からなんかあのやりかけてあるの仕上げてお持ちしようと思ってたんですよ、なんておっしゃって、まあ私がすっかり忘れてたんだけど、きれいなスリッパをこしらえてくださったのよ」
夫「スリッパ？」
妻「うん」
夫「うーん」
妻「で、それをもってらして、結局しばらく話してたの」 (pp. 94-95)

ここでは、田中にはなかった、発話の促し、元の話題への回帰という2つの機能が指摘されていて、これらの背景にある性質として、次のような機能を認めている。

5. 「で」は会話の流れの中で、話題の方向をコントロールしながら会話の首尾一貫性を保ち、会話者の役割分担や、やりとりの順番をコントロールする機能を持ち合わせている。(p. 95)

この後、高橋(2001)⁴は、「で」の基本的機能について次のような観察を示した。高橋の記述の要点を記すと次のようになる。

6. 「で」の基本機能は次の2つの面から捉えられる
a. 前件と後件との間に話し手があらかじめ想定した関係があることを示す機能
b. 直前の発話行為に一区切りついたことを示す機能 (pp. 98-99)

6aについて、『で』は、関係付けの内容を示すのではなく、『何らかの関係付けがなされている』ということだけを示す」(p. 98)と説明されているが、関連性はあるがどのような関連性かは述べないということだろうと思われる。この見方は、田中とはいくぶん異なるが、西野の「首尾一貫性」の保持ということだけを認める見方と共通するものであろうと思われる。ただし、独話で「で」が多いのは、独話には、対話には見られない計画性があるからであるとする議論は問題があると思われる。この点については次節で触れる。

また、6bの、「で」が区切りを示すとする点は、高橋の新しい指摘だろうと思われる。たしかに、「で」は文頭に多く現れるなど、出現位置に特徴があり、それがどのような位置であるのかは「で」の性質を考える上で重要なポイントである。

この「区切り」という点については、Watanabe

(2003) の議論ともかかわる。Watanabe は、「で」の性質について次のように述べている。

7. “DE” seems a strong cue to mark the beginning of a new discourse segment. (p. 116)

Watanabe は、談話境界として、discourse-segment-boundaries (DSB 談話単位境界) と non-discourse-segment-boundaries (NDSB 非談話単位境界) という 2 つのものがあつた場合、「で」は、非談話境界より、談話境界の後に有意に多く出現するという観察を示している。DSB とは、休止間発話単位 (Inter-pausal-units) の境界で、複数の接続詞、フィラーが表れる強い境界であり、それに対して NDSB とは、IPU の直前の文境界で、フィラーや接続詞によるマークのないところ、と説明されている (pp. 111-112) が、このように見たときに、「で」は、一つの話者が終わつて、次の新しい話題に移るという境界に現れるとする見方である。「区切り」と言つても、話題の区切りもあれば、統語的な区切りもあるわけで、このような区切りの質を区別して捉えることは、「で」の性質を考えるために重要なことだろうと思われる。この区切りの性質についても、次節で触れる。

石島・中川 (2003) は、以上の論者とは異なる方向からアプローチをしたものであるが、「で」は「それで」の短縮形という立場から、「それで」と共通する機能を挙げ、さらに「で」のみに見られる機能として次の 3 つを挙げている。機能の説明と例⁵を併せて示す。

- 8 a. 説明：つまり、すなわち (前文を具体例を用いて言い直しているような場合)

・～こういったような画面で検出ができていたことを覚えていらつしやるかと思ひ

ます。で、この問題に対して、われわれは一つの仮説を立てました。

- b. 補足：ちなみに、ただし (前文に必要な事柄を補足する場合)

・クラスター数は～。で、ここでは書いてありませんが、評価文は 50 文用いております。

- c. リズム：必ずしも「で」は必要がなく単に発話時のリズムを取るために用いる場合。

・ここではまず、言語音を用います。こちらですね。で、次に高さ、強さの効果は言語音モード、非言語音モードによってどのように異なるかを検討します。(p. 15)

この区分で興味深いのは、高橋、Watanabe のいう「区切り」「境界」、「新しい話題への移行」というものを、たとえば「補足」用法 (8b) の場合に認めることができるかという問題提起にもなつていて、「で」を、区切り、新話題への移行とする議論を見直す手がかりを与えてくれる点である。また、分類基準が明確でないという点で、分類としては問題があると思われるが、「リズム」とでもいうよりほかに仕方のないような用法のあることを指摘した点も興味深い。石島・中川のサンプル調査によれば、「で」の出現総数 176 のうち、「リズム」が 72 (約 40%) ともっとも多く、次に「累加」が 63 (36%) だったと報告されている。例えば、冒頭に挙げた例 1 の「で」などはどのような機能を持つのかといったときに、単に「区切り」であるとか、「首尾一貫性」を示すなどと言われても、その内実を捉えているとはいえないわけで、この「リズム」と言われるものが何をしているのか、これが最大の検討課題でもある。

以上、先行研究をいくつか見てみたが、ここ

までの議論を整理し、冒頭に述べた本稿の目的を整理しなおすと次のようになる。

- 9 a. 「で」は、局所的に見たとき、その前後の文の関係をどのように捉えているのか
- b. 「で」は、談話全体から見たとき、談話についてどのような働きをしているのか

以下、これらの問題点について、まず対話データ、次に独話データでの「で」について用法を観察していくことにする。

3. 対話に現れる「で」

上に挙げた先行研究では、「で」が独話に多用されるという現象が指摘されていた。それは、対話では少ないということを暗に意味しているようであるが、対話に出ないわけではない。

ここでは、『インタビュー形式による日本語会話データベース』（北九州市立大学）のサンプルから、「で」の現れる様子を観察し、次の3つのタイプに用法を区分した。

10. 対話の「で」の機能

「で」は、談話内で、次のような操作が行われるポイントをマークする

- a. 回帰：既出の話題へ戻る
- b. 展開：目下の話題の枠の中での展開する
- c. 帰結：前件からの帰結を示す

これらが具体的にどのようなものか、それぞれについて述べる。

まず、aの回帰の例を挙げる。

11. 1: そうですか。ニューヨークは日本人の

観光客一など多いんでしょうか？

2: そうですね、(1: ん) あの一ま、あの住んでいらっしゃるかたも多いですけども、(1: はい) 観光のかたも多いですね。はい。

1: そうですかー。

2: ええ。(1: うん)

1: で、日本にいらっしゃって研究生生活、ま、あの一度おでになって何年か勉強なさって帰ってらっしゃって、なにか、逆カルチャーショックのような、経験はなさいましたか？ (CJf) ⁶

ここに出ている「で」は、この引用の範囲を見ている限りでは、話題を転換しているようにしか見えない。話者「2」の本拠地であるニューヨークの日本人観光客の多さについてのやりとりから、「で」の出現を境に、日本での研究生生活に話題が変わっているからである。

しかし、この「で」を10ターンほどさかのぼった部分では、話者「2」がニューヨークで勉強をしているという話題が展開されている。このインタビューは、話者「1」が話者「2」に質問するという形になっているが、話者「2」の職業、身分ということが、10ターンほど前の部分では中心的な話題になっていて、そこでニューヨークでの生活が話題になっていたのである。

ところが、話者「1」が自身のニューヨーク経験を持ち出したために、話題がニューヨークの治安、日本人観光客の多さなどへ移ってしまった。前の話題が完結しないままになってしまったのである。それを「で」によって、元の話題に戻して（回帰させて）いるわけである。

この回帰用法のポイントとして、次の2点が指摘できる。

12. 回帰の「で」の特徴

- a. その談話の中で以前話題になったものであるが、完結しておらず、かつ、話し手が何らかの理由で再び話題にしたいと認識している話題へ戻るマークである。
- b. それまでの話題に区切りを付けるマークである。

対話などでは、流れが、予想していたものから逸れていくことはよくある。参加者が機会を見て元に戻ろうとする場合もある。「で」は、ここではそのような役割を担って、一時中断されてしまった、当面の関心事に戻ることをマークするものと思われる。

「で」がこのような性質のものだとすれば、12bは、それに伴って起こることであって、当然のことながら、区切りを付けるということそのものを目的としたものではない。談話において区切りを付けるということには、言うまでもなく、何らかの目的のために行われるのであって、たとえば、談話の終結、話題の転換などのために行われることである。ただ、重要な点は、前の話題が終結したことを示す、あるいは、終結させる機能を「で」が持っていることで、終結と認識したポイントを示すことである。

次は、「で」の2つめの用法、展開（10b）について。回帰が既出の話題に戻るという、いわば後ろ向きの方角を持つのに対して、ここで言う展開とは、前向きに、それまでの内容となんらかの関連性を保ちながら、新たな段階に進めることである。新たな段階に進むということでは、回帰も一種の展開であるが、話題の既出性の有無によって区分したものである。石島・中川の「補足」（8b）なども、同一の話題内容をめぐって現れるという点で、このタイプに属するものと見ることができよう。

13. 1: あっそうですね。今のアルバイトは、午後ですか？

2: 午後、授業が終わってからです。

1: んー、で一週間に何時間ぐらい？

2: 3、4回。

1: ああー。そうですか。はい、わかりました。(MYf)

14. 1: (…)でーぞちょっと読んでみてくださいね、(2: あ、はい) んーこちらファーストフードレストランでのアルバイトを一、あの吉田さんがしたいと思っていて一、申しこんできました。

(2: はい) でわたくしが、面接する側になります。(2: あ、はい) で、これがうちの条件です。(2: はい) で、あの吉田さんもう少し、できるだけいい条件に(2: はあ) なるように話してください。(MYf)

13は、対話の話題を進めていくときに現れる「で」であり、前の話題、文脈と関連を持ちながら、新しい話題が提示される所に現れる。それに対して、14は対話の中に現れる一人話で、まとまった長さの説明（ロールプレイの説明）をするものである。この場合は、ひとつのターンの中に複数の「で」が現れていて、「で」はロールプレイの手順の区切りに対応している。

このような展開の仕方をゆるい展開と考えると、次に挙げる帰結（10c）は、強い展開と見られるものである。13、14では、展開の方角は決まっていない。それに対して、帰結は前後に相応の必然性が認められる。「で」の前に前提となるコトガラが示され、「で」の後にそこから導かれるコトガラが示される。2つは、1文をなすことも多く、その点でも緊密なつながりを持っている。

15. 2: もしもしーまちこさん、ちかこですー。
元気ですか? ええっと実はー/今度、あ
のー/新しい、最新の映画がーあの一上
映されるらしくてーでーそれに行きた
いんだけどー一緒にーどうですか。
あの一もしーよかったら、あの一今晚
わたしちょっと遅くまで起きてますか
らー電話をぜひください。ください。
え、電話番号分かりますよね。それで
はじゃあ、また。(CJf)

16. 1: 職場のそのなんていうんでしょう(2:
ええ)、家庭を持ってお子さんをいらっ
しゃる方に対する(2: ええ) 理解な
んかはいかがでした、でしょうか。

2: うーん、多分厳しかったと思います。

(1: あーそう) まわりの目も厳しか
ったと思いますが、なにせもう突然休
まなければいけない状況になって

(1: うん) で、ご恩返しはぼちぼち

(1: うん) させてもらうみたいな形
で(1: うん) ええ、十分じゃなかつ
たまんま辞めてしまいましたので

(1: うん) ええ(1: そーですか)
ええたぶん。(KJf)

15、16の「で」は、「そういう事情なので」「だ
から」というようなパラフレーズも可能である。
が、あえて、ゆるい展開の表示と同じ表現を使
うことで、積極的な関係表示をせず、聞き手に
解釈を委ねているわけである。このような「で」
は、対人的なもので、独り言では出にくいもの
であろう。

10 b、c に挙げた展開、帰結は、2 つともそ
の強さの違いはあるが、「で」の前に示された話
題と、「で」の後の話題とに関連性のあるもので
ある。展開タイプ(10 b)として挙げたものは、
一つ的话题をめぐって、その話題についてより

多くの情報を加えたり、詳細化したりするもの
で、いわば、目下の話題についての情報を豊か
にするものであった。それに対して、帰結タイ
プ(10 c)として挙げたものは、情報の豊富化
ではなく、情報とそこから導かれる帰結を加え
るものだった。

ここまでの「で」についての観察をまとめると
次のようになる。

17. 「で」の展開性

そこまでに現れた話題が一区切りされると
ともに、関連性を持った内容が続くことをマ
ークする。後続内容は、「で」の話題を展開、
補完し、また次のステップへ移行させるもの
である。

西野(1993)の言う「首尾一貫性を保ちなが
ら」会話を展開させるという性質の背景となる
のは、このような性質であり、それは必ずしも
高橋(2001)の言う「あらかじめ想定された関
係」が「で」の前後にあるということとはつな
がらないのではないかと思う。また、それを裏
付ける用例も、筆者が見たデータの範囲では見
出せなかった。

以上、対話に現れる「で」について観察を行
ったが、『日本語会話コーパス』を見ていくと、
次のようなタイプの用例がいくつか見つかる。
この用法について、触れておきたい。

18. 1: (…)で、今、たしか相撲もしてるよう
なんですが、(2: ええ、ええ) しって
ると、わたくし実はあまり見ないんです
(2: ええ、ええ) が、お好き(2: え
え) です

2: 相撲も見ます。(1: そうですかー)
ええ、まああの一、始めから終わりま
で見るっていう、んん、(1: うん) そ

こまでいきませんけれども(1:うん)
あの今日はどうだったかなってゆうかん
じで、(1:うん) あの一結果とか調
べたりとか(1:うん) そういうこと
は、はい、(1:あー) します。

⇒1: そうですかー。で、ま、先週、テレ
ビでつね、は、あのあれですけども、
先週はもう台風で大変だったんです
が、あの一台風の時は日本にいらっし
やいましたよね。

2: ええ、はい、おりました。

⇒1: ニューヨークでは、そういう台風の
ような、あの一、お、気候になること
はあるんでしょうか? (CJf)

「で」は、それ以後の内容と、それ以前の
内容とに必ずなんらかの関連性が見出せるという
のが、ここまでの観察だったが、この例は、少
なくとも「⇒」の時点では、関連性が見出せない。
この引用の冒頭部分まで、テレビでスポ
ーツ中継を見るのは好きかという話題が繰り返
られていた。ところが、「⇒」のところで、話題
は急に「相撲」から「先週の台風」へと移って
いる。したがって、「で」には、未知の話題へと
話題を“転換”させる用法があるのかとも思わ
れるのである。が、当該の談話を冒頭までさか
のぼって調べてみると、「で」が、まったく新し
い話題を持ち出すために使われるのではないこ
とがわかる。また、そのような例もない。⁷「で」
は、必ず何かを受けるのである。「で」は、「そ
れで」の短縮形、つまり「それ」が取れた形と
言われるが、このような「で」の性格からすべ
ば、先行文脈を受ける「それ」が潜在してい
ると見ることも強ち無理なことではない。

では、この18の「で」は何かということにな
るが、「⇒」のところでは「ニューヨーク」の話
題になっている。この例は、先の11の例と同じ

話者「2」のもので、この話者はニューヨーク
に留学している。したがって、話題としての関
連性は保持されている。しかし、内容的な回帰、
中断された話題に戻り、内容を完結させる、と
いうような性格は持っていない。

注目されるのは、このあと5ターンほどのニ
ューヨークの台風の話が続いた後、ロールプレ
イの場面へと移行することである。つまり、「で」
のあとは、ロールプレイに入る前の終結手続き
であり、「で」は終結手続き開始をマークするも
のとなっている点である。

談話の終結の一つの方法として、新しい話題
を持ち出さず、すでに話すことのなくなった話
題を繰り返すというようなものがあると言われ
るが(橋内1999)、この「で」に続く内容は、そ
の終結手続きに沿ったものと言えよう。この例
では、その種の古くなった話題は、「→」の部分
に現れている。こういう視点から見ると、「で」
が終結のために、既出の話題を持ち出す用法は
いくつか見られる。結果として、「で」は、既出
話題に触れつつ談話を終結させるというような
場合の、談話構成上のマークにもなるわけであ
る。

このような用法を擬似回帰型の「で」とする
と、回帰性を利用した談話操作、談話コント
ロールのひとつの方法として使われていると言え
よう。表面的な転換性もあるので、擬似転換型
の「で」と呼んでおくことにする。

19. 擬似回帰型(擬似転換型)の「で」

- a. 「で」に続く内容に関連性のある内容が
既出であることを示す。
- b. そのような表示によって、結果的に、談
話の方向をコントロールする。
- c. 「で」で区切りを付け、談話構造上のス
テップを先に進める。

ところで、「で」の後続文には、次の20に示すように、一定のモダリティ制約があるが、これは「で」が談話内での内容的な広がりを作ることを主とするもので、談話外的な行動などのための区切りを記すものとしては働かないことを示すものである。

20 a. 5時になりましたね。{ さて／ では
／*で }、そろそろ出かけましょう。

b. 5時になりましたね。{ ??さて／ ??では
／ で }、あなたは帰りますか。

「さて」「では」などは、誘いなどの行動的な働きかけが続くが、「で」の場合は、そのようなモダリティを持った文は続かない。しかし、質問は後続させることができる。それは、質問が対人的な発話行為ではあるが、内容補完的な働きをするものだからである。「さて」「では」も、質問が後続しないわけではないが、その場合は、前件が成立したことが、質問という行為を行うきっかけになったことを示すもので、内容的な展開を示すものではない。

このような構文的な制約は、「で」が、既出あるいは展開中の話題、文脈について、内容的な補完、展開をするという性質と一体のものである。このことも併せて、以上の観察をまとめる。次のようになる。

21. 対話の「で」の基本的な性質

——境界と関連の形成とその表示——

- a. 目下の話題や文脈に区切りを付けると同時に、そのあとに話し手の関心事が続くことを示す。つまり、「で」は、積極的で明示的な関係表示はしないが、関連性のあることが後続することを示すものである。
- b. 後続する関心事とは、既出話題であったり、現話題の関連話題であったりするが、

それらの内容を展開・補完することで豊かにし、あるいは、談話構造上の別のステップに進むことを示す。

図式化して言えば、「で」はなんらかの話線に絡まっていて、そこから離れないということのマークだとも言えよう。

そのために、後続の話題・内容が、目下の話題に近ければ「展開」となるし、遠くにあれば「回帰」となり、論理的な関連性を認めるならば「帰結」というようになるのである。表面的には異なりがあるように見えても、基本的な性質は、関連のある内容を続けていく、ということとあると見てよいのではないと思われる。

4. 独話に現れる「で」

次に、独話に現れる「で」について検討する。対話の「で」とは異なる性質があるか、あるとすればどのような異なりか検討する。

4-1. 独話に「で」は多く現れるのか

——対話との比較から——

ところで、「で」は、確に対話と独話では現れる頻度は違っていて、独話に現れることのほうが多いことは事実かもしれない。そのような観察から、「で」の頻度に影響を与えるのは、対話と独話のどのような違いによるのか、という議論に発展していくのはごく自然なことのように見える。石黒（2008）では、講演、講義などの独話に「で」が多い理由として次のように述べられている。

22. なぜ「で」が多く使われるかというと、独話というのは、対話と違って、基本的に話す内容があらかじめ準備されている

からです。話し手は、ときには脱線しながらも、準備してきた話の本筋に従って話をしようとします。「で」は、話の本筋を意識し、それをなぞっているときに現れる接続詞で、次の話を導き出す推進力になります。ですから、即興的に話す対話では少なく、話すのに準備を必要とする独話で多いのです。(pp. 190-191)

ここで考えるべきポイントは2つある。ひとつは、「で」の出現の多さを独話か対話かというコミュニケーション形態によるとしていいのかという点、もう一つは、発話についての準備の有無ということが「で」に影響するのかという点である。

独話データの代表として、国立国語研究所(2004)のデータから、70の学会発表のうち、3分の1ほどの発表(23発表)を任意に選び、文の冒頭に「で」の出現する割合を求めたものが、次の表である。

23. 学会発表における「で」の出現状況

a. 総発表数	23
b. 総文数	1643
c. 文頭の「で」の総数	440 (総文数に対する割合は30.8%)
d. 出現頻度別の分布	
0%	(4発表)
0%以上20%未満	(7発表)
20% ~40%	(6発表)
40% ~60%	(2発表)
60% ~80%	(4発表)
80% ~	(0発表)

ここで調査の対象とした学会発表の中で、もっとも多く「で」の使われた発表では、48文中35文(72.9%)で、文頭に「で」が現れた。冒

頭のあいさつ、名乗り、最後のあいさつなどの部分には「で」は現れないので、実質的な発表部分ではもっと高率ということになる。

しかし、その一方で、学会発表でも「で」をまったく使われない発表が少なからず(ここでは4発表)あることがわかる。また、「で」の出現頻度が5%以下だった発表も含めれば、23発表中6発表で、ほぼ4分の1となる。これは少ない割合である。

学会発表と講演とは、また別の性質があるのかもしれないが、独話だからと言って、常に「で」が頻出するものではないようである。

これに対して、対話を集めた北九州市立大学(1996)のデータについて、40対話中から任意に10対話を選び、「で」の出現数を数えたものが次の表である。ただし、ここでは、ターンの冒頭に現れる「で」を数えたので、上の国語研の場合と単純な比較はできない。⁸

24. 対話データにおける「で」の出現状況

a. 総対話数	10
b. 総ターン数	1194
c. ターン冒頭での「で」の総数	90 (総ターン数に対する割合は7.5%)
d. 出現頻度別の分布	
0%	(0対話)
0%以上20%未満	(10対話)
20% ~40%	(0対話)
40% ~60%	(0対話)
60% ~80%	(0対話)
80% ~	(0対話)

単純な比較はできないと言っても、学会発表などと比べると、「で」の出現は少ない。また、頻度の高い対話と言っても、このデータの中で最大のもので、105ターンのうち15ターン(14.3%)という程度で、学会発表の場合とは

大きな違いがある。⁹

したがって、一般論としては、対話においては「で」の出現はそれほど多いとは言えないということになるだろう。しかし、この北九州市立大（1996）データの10例について、使用された接続詞の分布を調べると、使用頻度の高いものは、「じゃあ」の37%に次いで、「で」の32%だった¹⁰。

また、加藤（2003）は、テレビ番組での対談番組をデータとして、話者が自身の体験を語る際に現れる接続詞を調べたもの、つまり、対話の中の独話を調べたものだが、そこでの「で」の出現率は、「接続詞なし」の51%に次いで、33.6%と2位を占めている。相対的に見れば、「で」は対話においても、接続詞の中では、高い比率で現れているのである。北九州市立大のデータでも、手順の説明、読んだ本の説明など、話し手が一人で長く語る部分には、「で」が多く現れる傾向が見られる。「で」は、語りにおいても高い頻度で出現するようである。

したがって、対話でも「で」は少なからぬ頻度で出現することは間違いないのであるが、しかしやはり、石黒などの指摘するように、独話での現れ方は、対話とは異なりがあると言えそうである。独話に頻出するのには、対話とは異なる背景があるのではないかと推測される。

4-2. 独話の「で」の性質

では、独話に現れる「で」はどのような性質のものなのか、上に観察した対話の「で」と異なるものなのかを検討しよう。対話の「で」についての分析では、回帰、展開、帰結という3つのタイプの用法を区別した。独話の「で」についても、このような談話の動きを示す用法が認められる。それぞれの例を挙げる。

27. 既出の内容への回帰の区切りを示す「で」

本試行の間はこの実験者と母親はヘッドホンを通してマスキング用の音楽を聞きました。で、曲の提示順(F え)、先程あった(F え)長調六曲、短調六曲の提示順、それから音源の左右(F えー)、右から出たり左から出たりという、(F え)半分ずつ出るんですけどもその(F え)、左右の順は全て被験時間それから月齢間でカウンターバランスを取りました。(A01F0055)

28. 新しい内容への展開の区切りを示す「で」

それから、(A ビー; B)に示しましたように(F え)録音されたもの(A シーディー; C D)ですとかテレビだとかそういうもので(F えー)よく聞いているかどうかというスコアとスコアが(F えー)高ければ高い程(F え)原型と変形の(D しょうちゅし)聴取時間の差これは差の絶対値です(D2 は)が(F えー)高水準で相関が認められました。で、次に(F えー)結果をまとめたいと思います。(A01F0055)

29. 帰結への区切りを示す「で」

(F え)ただし(F えー)<FV>私達が 日常耳にするような音楽の 旋律の形態を素材とした聴取反応については(F えー)まだゼロ歳児で(F え)そういうことが可能であるとか<雑音>(F あの一)そういうことに関してはまだ報告されておりません。<雑音>

で、長調短調の(F えー)旋律の形態における違い(F えー)旋律としての(F そー)長調短調の違いに気付くのはいつ頃からののか、本研究では童謡の旋律を用いて(F えー)まず第一段階の検討として長調の原型旋律とそれを短調に変えた変形旋律を乳児に示して選好聴取反応を検討してみ

ました。(A01F0055)

27では、「先ほどあった」という表現にあるように、既出話題であることが明示されていて、そのことを示しつつ、談話を展開させる区切りを示すものである。

ただし、前節でも述べたが、回帰と言っても、元に戻って内容を完成させるという西野の挙げた例(8a)のような純粹の回帰ではなく、既出であることに触れつつ先へ進むという擬似的な回帰となっている。さらにまた、今回見たデータの中では、純粹の回帰の例を見つけることはできなかった。

28の「で」は、談話が新しいステップに進む、その境界を示すものである。また、29は、これは、対話の「で」の帰結表示と同様に、「それで」「そういう事情なので」というようなパラフレーズが可能なもので、用法としては「それで」に近いものである。

以上、対話の「で」の観察をベースに、独話の「で」を見たが、純粹な回帰型のものはないようであるが、展開、帰結などを示す用法はあり、対話の用法とそれほど違わない。しかし、独話では、冒頭に挙げた例1のような、文頭に、それも1文ごとに出現するような用法がある。これは、対話データでは見られなかったものである。次にこの例1の「で」について、その性質を考えることにしたい。

まず、先に挙げた例1を再掲する。

1. **で**、そうすると(F あの一)新しい学習単元が(F え)組み込まれてますよっていう形で(F え一)学生さんには提示すると(F え一)というようなインターフェースになっております。

で、(F え一)この(F ま)システムに関しては<ベル>(F え一)(F ま)IPA¹¹さ

んのですね(F え一)教育の(F お一)情報化推進事業の中で実施さしていただいた関係で(F え一)実証実験を行ないなさいと(F お一)という案件でございましたので、実際この作られたシステムで(F え一)実験を行ないました。

(F え一)期間はですね昨年度なんですけど四か月(D か)実際四か月半ですね。

⇒1**で**、(F え一)参加学生数は学生が二百五十六名講師三十名。

⇒2**で**、環境は(F ま一)学内のイントラネットおよびダイヤルアップと。

⇒3**で**、内容はですね授業内容はこれは学生さんには内緒で(F え一)正規の授業の中で(F え)単位を認定する通常の授業の中で実施したんですけれども(…)。(A04M0026)

このように「で」が多用される理由として、2つのことを挙げたい。

まず、「で」が前後の積極的な関係表示をしないことである。上述のように、「で」の基本的な機能は、目下の話題や文脈について、内容的な区切りを示しつつ、関連のある新たな内容が続けるというところにあると思われるが、1の「⇒1～3」を付けた文は、いわば、話者の行った「実験」の対象、方法などの説明が並列的に提示されているだけである。これは、「で」がなくても、関係理解に問題はないと思われるが、逆に、他の接続詞(たとえば「それから」)を3回繰り返したりすると、かえってつながりをわかりにくくする可能性もあり、「で」は一連の話は関連のあることである、ということだけを示すだけで、それ以上の積極的な関係表示はしていない。そのために、頻出することになり、また、頻出が可能になっているのだと思われる。「で」は、「前件と後件との間に話し手があらかじめ想定した関係があることを示す」とするだけでは、「で」

の役割を捉えたことにはならないだろう。

2つ目は、発話の処理支援ということである。話し手は、発話において、実時間的に、これから話すことの形成処理と、それまでの文脈の保持を同時に行わなければならない（荳阪2002）。内容の区切りを明示することは、話し手にとって、その処理に区切りを付け、保持単位を明確にするとともに、一瞬の心的な余裕を確保する手段ともなりうる。「で」は、このような実時間的な発話処理に連動した性格も持っているように思われる。この実時間的に進行する発話との連動という性格は、いわゆるフィラーが持つ性格そのものであるが、文内で孤立的な性格の強い接続詞が、そのような性格を帯びることはありうることである。「で」の頻出を、石島・中川（2003）は「リズム」と捉えたのかもしれないが、その背景には、「で」の表す意味の特性、それと、話し手の発話処理のための心的な支援への希求があるのではないかとと思われる。

このような心的な余裕を作るには、「えー」「えーと」などを使うこともできるが、前後が関連ある話題であるという話し手の意識を「で」によって表示しつつ内容形成を行う、あるいはそのような意識のもとで発話処理が行われるがゆえに「で」が現れるということなのではないかと思われる。

したがって、「で」がよりフィラー化した場合には、「で」は現在進行中の発話処理内容と連動したものになるはずである。発話行動には実時間的な発話処理をかかわる部門があるわけで、それが言語的に支援される場合の一形式として「で」が機能しているのではないかとと思われる。

このとき、「で」は当然のことだが、接続詞というカテゴリで括られるものではなくなる。話しことばに現れる要素には、文や談話を構成するものだけでなく、発話行動そのものを支え、形成するための要素も入っている。ポーズがあ

ったり、身振りをしたり、そういうパラ言語は、発話内容を支える面もあるが、発話形成と連動して、発話という行動そのものを助けるという面もある（喜多2002）。フィラーには、フィラーのみに使われる「えー」「あー」などの語だけでなく、他品詞から派生した語群も含まれていて、それらの語は、その本来の語が持っていた性格を保持していた形で発話処理に伴って出現する（小出2008）。接続詞のフィラー化については、ほとんど言及されていないが、近年使用が広がりつつあると言われる「とー」や「ってか」などの形式も、このような発話支援機能を持つ形式になりつつあるのではないかと思われる（鈴木2007）。

5. まとめと課題

以上述べたことをまとめると次のようになる。

30. まとめ

a. 対話の「で」の基本的な機能（21の再掲）

1. 目下の話題や文脈に区切りを付けると同時に、そのあとに目下の関心事が続くことを示す。
2. 後続する「目下の関心事」とは、既出話題であったり、現話題の関連話題であったりするが、それらの内容を展開・補完するなどして、談話構造上の次のステップに進むことを示す。

b. 独話の「で」の機能

ーフィラー化する「で」ー

「で」は、とくに独話においては、目下の話題・内容が展開しているときに、発話処理に連動し、区切りを示すことにより、処理を支援し、また処理のための心的な余裕を作るというフィラーとしての機能を

持つ。このような「で」は、発話冒頭に頻出することがあるが、aに挙げた基本的な機能を保持しており、連続的な内容の発話を形成処理中であることを示す。

最後に、このような「で」の観察を深めるための方向を記して、今後の課題としたい。

ひとつは、前節でも述べたが、接続詞のフィルター化の問題である。「それと」「というか」などが、「とー」「ってか」などという形に短縮化され、文内での明確な位置づけを持たないで使われるような例がある。これらの例とあわせて検討することで、より妥当な観察が得られるかもしれない。

ふたつめは、通時的な観点からの検討である。「で」という語の早い用例は、『日本国語大辞典』によれば、近松門左衛門『幼稚子敵討』が早い例として挙げられている。しかし、その後『浮世風呂』『春色梅暦』など江戸期の戯作にも現れておらず、明治期以降も、多くは現れない。¹² 夏目漱石『吾輩は猫である』、尾崎紅葉『金色夜叉』、二葉亭四迷『平凡』などには例が見られるが、例外的なものかもしれない。しかし、その中で、紅葉の用法は現在のものと異なりがあるように思える。次のようなものである。ここでは、「で」のあとに、対人的な行為要求が来ていて、「だから」と言い換えられる。

31. 断じて詐なるべしと思ひながらも、貫一の胸は跳りぬ。

「はあ、宮さんは承知を為ましたので？」

「さう、異存は無いのだ。で、お前も承知してくれ、なう。一寸聞けば無理のやうではあるが、その実少しも無理ではないのだ。私の今話した訳はお前にも能く解つたらうが、なう」(『金色夜叉』六章)

この例からだけではなんとも言えないが、「で」が現在のような用法になったのは、それほど前のことではないということになるだろう。「で」は「それで」が短縮されたものと言われるが、どのようなプロセスで変わってきたのか、変化の見やすいサンプルとして追究することができるのではないと思われる。

<注>

1 国立国語研究所 (2004)『日本語話し言葉コーパス』に収められているデータ。A04M0026はデータに付けられた番号。以下、会話末にA0で始まる記号を付けたものは、このコーパスのデータ番号を示す。

このコーパスでは、いわゆる文の区切りなどはされていないが、ここでは文の区切りと考えられるところで、句点を打ち、改行した。さらに、「で」の所在を強調するために、太字にし下線を施し、その後に読点「、」を打った。その他の表記はもとのままである。また、「文」というものの規定も議論のあるところであり、情報単位、発話単位など、より実際のあり方を反映した用語が適当かもしれないが、それでもあいまいさは残る。ここではひとまず常識的な「文」という概念に従うことにしたい。

2 このような観点からの説明をしている事典、概説書を挙げると、日本語教育学会(1984)『日本語教育事典』、グループ・ジャマシイ (1998)『日本語文型辞典』、庵ら (2001)『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』などがある。

3 「で」の太字表示、下線付けは、筆者による。以下特に断らない限り、「で」という表示は筆者によるものである。

4 高橋 (2001) は、学会発表の要旨であり、立論の根拠などについての詳しい情報はない。

5 石島・中川 (2003) に採られている例は、国立国語研究所 (2001)『日本語話し言葉コーパスモニター版』のものである。

6 (CJf) などの記号は、コーパス中のサンプル名を示す。以下同じ。

7 石島・中川(2003)は、「で」の用法として「転換」を挙げているが、そこに挙げられている用例を「転換」とするのは無理があると思われる。

8 またターンの認定も揺れが予想されるが、元データでの認定の仕方に従った。

9 なお、対話データの中でもっとも多く使われた接続詞は「じゃあ」で、1194ターンのうち103ターン (8.3%)

冒頭に現れた。

- 10 それ以下はずっと減って、「でも」13%、「それで」7%、「だから」5%というような数字だった。
- 11 国語研（2004）では、「(A アイピーエー；IPA)」というように読まれた読みみ方と記号が併記されているが、ここでは煩雑さを避けるため、「IPA」というように、記号のみを残した。
- 12 青木（1973）では、明治以降に用例ありとされている。しかし、言文一致を目指したと言われる美妙「武蔵野」にも、また、言文一致運動に影響を与えたとされる三遊亭円朝「文七元結」「札所の霊験」などにも現れない。宮本百合子「明るい海浜」、国木田独步「武蔵野」、久生十蘭「顎十郎捕り物控え」、横光利一「旅愁」、太宰治「斜陽」「新釈諸国噺」などの作品を見た限りでは、用例はなかった。

<参考文献>

- 青木怜子（1973）「接続詞および接続詞の語彙一覧」『品詞別日本文法講座6 接続詞・感動詞』（鈴木一彦・林巨樹編）明治書院：210-253
- 石黒圭（2008）『文章は接続詞で決まる』光文社
- 石島満沙子・中川道子（2003）「日本語母語話者の独和に現れる接続詞『で』について」『日本語教育方法研究誌』10-1：14-15
- 荻阪満里子（2002）『ワーキングメモリー脳のメモ帳』新曜社
- 加藤陽子（2003）「日本語母語話者の体験談の語りについて——談話に現れる事実的な「タラ」「ソシタラ」の機能と使用動機——」『世界の日本語教育』13：57-74
- 喜多壮太郎（2002）『ジェスチャー——考えるからだ』金子書房
- 小出慶一（2008）「現代日本語の語における意味・用法の広がりに関する研究」2008年度埼玉大学学位論文（未公開）
- 鈴木亮子（2007）「他人の発話を引用する形式——話し言葉の通時的分析」『月刊言語』3月号：36-43
- 高橋淑郎（2001）「談話における接続詞『で』の機能」『国語学』52-3：98-99
- 田中章夫（1984）「接続詞の諸問題」『研究資料日本文法4 修飾句・独立句編 副詞・連体詞・接続詞・感動詞』（鈴木一彦・林巨樹編）明治書院：81-124
- 西野容子（1993）「会話分析について——ディスコースマーカーを中心として——」『日本語学』12-5：89-96
- 橋内武（1999）『ディスコース——談話が織りなす世界』くろしお出版
- Watanabe, Michiko（2002）“Fillers and Connectives as Discourse Segment Boundary Makers in an Academic

Monologue in Japanese.”（和文名：渡辺美知子（2002）「談話境界標識としてのフィラー・接続詞—講義音声を対象として—」『東京大学留学生センター紀要』12：107-119.（英文）

<参照した辞書、辞典類>

- 白川博之監修（2001）『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク
- 日本語教育学会（1984）『日本語教育事典』大修館書店
- グループ・ジャマシイ（1998）『日本語文型辞典』くろしお出版
- 日本大辞典刊行会編（1972～76）『日本国語大辞典』小学館

<使用したコーパス>

- 北九州市立大学（1996）『インタビュー形式による日本語会話データベース』
- 国立国語研究所（2004）『話し言葉コーパス』

<キーワード>：フィラー化、接続詞「で」、話し言葉、関連性表示

* なお、本研究は日本学術振興会科学研究費補助金（課題番号：19520444）を得て行われた。